

カール・ヤスパースと人間学的構想

榊 井 靖 之

I はじめに——二つの問い——

前稿「カール・ヤスパースの思想的・学問的軌跡」¹⁾において我々は、ヤスパース（Karl Jaspers, 1883-1969）の歩み全体を考察し、精神医学から哲学へといたる歩みにその独自性を見た。しかしその転身に関して払拭しがたい以下の二つの素朴な問いから再度考察し、さらにその転身の真相を明らかにしてみたい。というのは前稿で見たように、精神医学者から心理学者への転身は、研究内容としてはまだある程度つながりもあるそれほど大きな転換ではなかったが、精神医学者、心理学者から哲学者への転身は、もはやその研究内容たるや全く次元の違ったものへの転換であったからだ。いったいどのような理由から、このような研究内容の転換が学的に可能であったのであろうか。その問いは以下の二つの問いに集約できよう。

1. なぜ、精神医学者ヤスパースが新たに哲学者へと転身したのか。
2. なぜ、精神医学者ヤスパースの哲学者への転身が当時ハイデルベルク大学において正式に認められえたのか。

第一の問い「なぜ、精神医学者ヤスパースが新たに哲学者へと転身したのか」については、一般的に考えるならば、ヤスパース自身が自らの専門、精神医学研究に限界を感じると共に、別分野である哲学研究への思いが強まり新たな可能性を感じて哲学者へと転身したと想像することができよう。人が自分の

1) この稿において前稿とは、榊井靖之「カール・ヤスパースの思想的・学問的軌跡——ヤスパースの精神医学的哲学解明のために——」『経済論叢』第175巻第5・6号，2005年5・6月を示す。

仕事に満足できず、他の仕事に転職することは一般的によくあることである。確かにそれを裏づけるかのようにヤスバースは、専門を哲学へと転じる以前には、精神医学者としては職を見つけることができず、経歴上は医学部の講師や教授でもなければ精神科の常勤医師でもなかった。『精神病理学原論』²⁾を世に送り著名になったにもかかわらず、結局のところ彼はハイデルベルク大学精神科クリニックの無給助手以上にはなれなかったのである。しかもその一方で、彼はそれに続く著作『世界観の心理学』³⁾において自らの哲学的基本的概念を示し、さらにヴェーバー (Max Weber, 1864-1920) の死において哲学研究への使命感がより一層強まったと自らが語っている。それ故に彼は、精神医学研究の行き詰まりの中で哲学研究への手ごたえと使命感とを次第に確信し転身へといたったのだと考えれば、その問いに対する答えとしては事足りるかに思われよう。

しかしそのような即断が許されないことは前稿で考察してきた通りである。つまりヤスバースは、専門を哲学へと転じる以前、前期ヤスバース⁴⁾においては大抵の精神医学者ではなかった。彼は、単なる精神科医、精神医学者にとどまるどころか、20世紀を代表する精神医学者であったのだ。彼は当時の精神医学の最高峰ハイデルベルク学派で彼独自の精神病理学を展開しその礎石を築き上げて精神医学界に一大旋風を巻き起こした。したがって彼は、当然いくつもの大学から招聘を受けていた。それを辞退することさえなければ、おそらくは精神医学界における重要な地位に納まりさらなる活躍を遂げたことであろう。したがって彼は、転身して20世紀を代表する哲学者として大成するまでもなく、すでに精神医学者としても20世紀を代表しその名をとどろかせていた。精神医

2) Karl Jaspers, *Allgemeine Psychopathologie*, ersten Auflage, Berlin, Julius Springer, 1913. (西九四方訳『精神病理学原論』創元社, 1971年)。

3) Karl Jaspers, (Serie Piper 1988) *Psychologie der Weltanschauungen*, München, R. Piper & Co. Verlag, 1971. (前田利男・上村忠雄訳『世界観の心理学 (上・下)』理想社, 1971年)。

4) 前期ヤスバース《精神医学研究時代》(1909-1913), 前期ヤスバース《心理学研究時代》(1914-1919), 中期ヤスバース (1920-1932), 後期ヤスバース (1933-1969) (梶井靖之「カール・ヤスバースの思想的・学問的軌跡——ヤスバースの精神医学的哲学解明のために——」『経済論叢』第175巻第5・6号, 2005年5・6月参照)。

学研究において行き詰まるどころか、ずば抜けた才能で素晴らしい業績を彼はすでに上げていたのだ。

ではなぜそのように著名であった精神医学者ヤスパースが職を見つけることができず哲学へと専門を転じたのか。その理由についても前稿で簡単に考察し明らかにした通りである。研究上の問題ではなくむしろ彼自身が気管支拡張症と二次的心不全といった難病を抱えていたことにその大きな理由があった⁵⁾。つまり彼は、その大学時代、専攻を法学から医学へと変更し、研究者としては医学博士、さらには著名な精神医学者へと成長を遂げながらも、難病を病む故に本来なら願ってもないハイデルベルク大学精神科クリニック主任教授への招聘さえ、その日常業務を責任をもってこなすことができないという理由から辞退せざるをえなかった。しかも、かと言って難病患者として研究してゆく上で、配慮と理解があった自らにとって理想的な研究環境であったハイデルベルク大学精神科クリニックを離れることもできなかった。このように彼は、素晴らしい業績を上げつつも難病故に用意された自らにとって最上のポストも辞退しなければならないという精神医学者としては自分ではどうすることもできない袋小路に入っていたのである。精神医学研究者としては、研究上行き詰まるどころか素晴らしい業績を上げた彼も、難病を抱える自らの身体的理由において就職上行き詰まってしまったのである。

そのような苦しい状況下でヤスパースは、精神医学の中でも精神病理学研究にひたすら没頭し書き上げた教授資格請求論文「精神病理学原論」が心理学上の評価を受け、ハイデルベルク大学心理学私講師の道を新たに踏み出すことができた。またさらには、それに続く『世界観の心理学』が哲学上の評価を受け、今度はハイデルベルク大学哲学教授への道を切り開くことができた。つまり精神医学者ヤスパースは、自らの精神医学研究の中で心理学研究、哲学研究へと研究分野を広げることによりそれら他分野でも高く評価されそちらへと道が開

5) Karl Jaspers, (Serie Piper 150) *Philosophische Autobiographie*, 2. Aufl., München, R. Piper & Co. Verlag, 1977, 1984, S. 12. (重田英世訳『(ヤスパース選集14) 哲学的自伝』理想社, 1965年, 11ページ)。以下, PA と略記。

かれるとともに、それに加えて前述の通り、ヴェーバーの死を機に哲学者へと正式に転身する決意を固めたのである。しかしヴェーバーの死を転機に哲学研究が自らの新たな使命となったという理由も、元来ヤスパースが難病を抱えてさえいなければ精神医学者の道を順調に進んでいたことを考え合わせると、それはあくまで転身の二次的な理由にすぎなかったと言えよう。

したがって、難病により精神医学研究への未来が閉ざされ行き詰まった状況下で、専門外の哲学上の評価を受けそちらへと転じるにいたったということがヤスパースの転身の真相と考えられる。実際彼にとってみれば、他者との共同研究や会議、診察といった変更しがたい時間的制約の中で日々体力が求められる精神医学者、精神科医から、臨床の必要がない故にそれに比べて体力をさほど消耗しない比較的個人ペースで可能な文献研究、論文発表、講義を主な仕事とする哲学教授への転身は、自らの病気に配慮し健康を害さないためには得策であっただろう。だとすれば、やはりそのような自分の病状への配慮から彼は哲学へと転じたのか。しかし健康上の理由だけからの転身であるならば、それは単に難病を抱えた研究者の場当たりの苦し紛れの転身という印象が拭えない。

自らの精神医学研究に情熱を燃やし、精神病理学研究においては限界を感じるところか独自の素晴らしい業績をあげていたヤスパースその人が、果たして以上のような理由だけから、まだまだ業績がなきに等しい哲学へと新たに転じる道をあえて選ぶだろうか。しかも転身後ヤスパースが、すでに何らかの構想を描いていたかのように独自の哲学を見事に構築してゆくことを考え合わせると、即断を待ち、その転身には何かもっと核心をつく研究上の理由があったのではないかと考えざるを得ない。それが第一の問いである。

第二には、「なぜ、精神医学者ヤスパースの哲学者への転身が当時ハイデルベルク大学において正式に認められえたのか」ということである。特に次稿で考察するようにヤスパースは、精神医学者時代から親しく交際し教えを受けていた社会学者ヴェーバーを哲学者として尊敬する一方で、ハイデルベルク大学

で心理学を教え始めて以来職場を同じくし再三にわたって意見を交わすこととなった哲学者リッケルト (Heinrich Rickert, 1863-1936) には、次第に失望し互いに哲学者ではないと厳しく批判し合うまでにいたった。このような彼にある唐突な言動、つまりは社会学者を哲学者とし哲学者を哲学者ではないとする彼の言動に出会うと、今日の我々は、そこに彼らしさを感じつつも、やはり素人哲学者という印象を受けざるをえない。またそれを裏づけるかのごとくに中期以降における哲学者ヤスパースの著作には、実存哲学という優れた独自の哲学が打ち出されてはいるが、同時代の哲学者の著作に比べ哲学的な専門知識に乏しい。その点同時代の哲学者ハイデッガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の著作の方がはるかに学識が高く魅力的である。したがってそこから容易に導き出される憶測は、やはり「ヤスパースは精神医学者あがりの素人哲学者ではないか」ということである。しかしここで忘れてはならないことは、彼は隠遁生活の下で一人精神医学から哲学へと専門を転じたわけではないということだ。精神医学者ヤスパースは、20世紀初頭において当時の知の最先端を担っていたハイデルベルク大学において、前述の通り学術的な共感と支持を得ることによって哲学の教職に就いたのである。つまりは今日からすれば、一見素人哲学者にも見える彼が、当時のハイデルベルク大学哲学部においては、実際に哲学教授にふさわしいとして承認され、その座についたという事実がそこにはあるのだ。その著作『世界観の心理学』にある哲学的成果が認められたとは言え、医学博士ヤスパースに対するこの異例の人事は、依然一つの事件であったとも言えよう。ではなぜ、また何をもって当時のハイデルベルク大学は、精神医学者ヤスパースを哲学者として高く評価したのだろうか。当然それは彼の哲学研究への高い評価を意味しようが、哲学博士でもなく本格的な優れた哲学書を書き上げたわけでもない当時の彼を、どうしてそこまで評価し得たのであろうか。それが第二の問いである。

II 人間学的構想

著名な精神医学者ヤスパーズがどのような動機から哲学者への転身へと踏み切ったのか、またその転身を何をもって当時のハイデルベルク大学は認めたのかという二つの問いに焦点を当てるならば、前期ヤスパーズの研究の内にすでに自他共に認めうるような哲学教授に値する優れた哲学的萌芽が見い出されていたと推測できる。というのは『世界観の心理学』など彼のその当時の著作にある哲学的業績は、まだまだ本格的な哲学的論文ではなかったわけで、むしろそこにある発展途上の哲学的萌芽こそが注目されたと考えられるからだ。したがって前期ヤスパーズにおけるその優れた哲学的萌芽とは何かという観点に立ち、前稿に引き続きもう一度まずは彼の自伝を中心にして前期ヤスパーズの歩みに当たってみたい。

ヤスパーズは、「自分の専門分野は人間であり、他の何ものに対しても私は、能力も興味も持続的にはもたぬであろう」⁶⁾と言う。また医学部へ進学する学生の動機は人それぞれであろうが、彼の場合、「哲学的な動機から医学や精神病理学を選んだ」⁷⁾と言う。本来人間を問う以外の研究には能力も興味もないと彼は言い切るのだ。つまり彼の研究は、専門分野がいずれに属しようとも、哲学的な動機からあくまで人間そのものに集中している。だからこそ彼は、自らの医学研究の中でさえ哲学を顧慮しつつ人間を問うことを止めなかった。それは、彼が大学時代にシルス・マリーアから両親宛てに書いた手紙の中ですでに、「哲学は、……医学と自然科学を通じ私にあってますます鼓舞されるでしょう。哲学は自分の見込みでは、一面性、すなわち悪い科学的傲慢から私を守ってくれるでしょう。哲学は人生一般に内実を与えるでしょう。哲学は、科

6) ザーナーは、ヤスパーズの言葉として、『そもそも「自分の専門分野は人間であり、他の何ものに対しても私は、能力も興味も持続的にはもたぬであろう」』(JASPERS Briefe I)を引用している。Hans Saner, *Jaspers*, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch, 1970, S. 22. (重田英世訳『ヤスパーズ』理想社, 1973年, 25ページ)。以下、Jと略記。

7) PA, S. 30. 邦訳41ページ。

学的思惟の不合理さから身を守るためには、必要です……」⁸⁾と言っている通りである。しかもザーナー (Hans Saner, 1934-) が言うように、その哲学への顧慮とは「ギムナジウム時代および学生時代の孤独と病気による不断の脅威の意識から生まれた」⁹⁾ものであり、彼の生に根本的に根ざしたものであった。不断の死への恐怖こそが、自らに切実な人間への問いに対する科学の限界と哲学の必要性を彼に強く意識させたのである。学者、医者としてのみならず、難病を抱え自らの生と死とに向き合わざるをえない重病人としての彼の切実な人間への問いが、常に彼を学的人間解明へとつき動かしていったのだ。

ということは、ヤスパースの研究の歩み全体、精神医学研究の最初から哲学へと転じた後の哲学研究にいたるまでが、その根底においては持続的に人間そのものを問う姿勢で貫かれていたと言える。人間そのものを問うこと、人間存在解明こそが、彼の前期、中期、後期の歩み全体を貫く重要なテーマであったのだ。彼が精神医学、精神病理学、心理学、哲学へと研究分野を広げ転じていったその歩み全体の中で、何よりもまず求めたのはあくまでその人間存在解明であって、それが次第に諸研究の中で練られ深められ、転身をも余儀なくしていったのである。したがってこの人間存在解明という研究構想こそが、彼の歩み全体を解く大きな鍵となろう。私は、その構想を彼に独自の「人間学的構想」としてここで考察したい。この人間学的構想という観点こそが、彼の転身、そしてひいては彼の歩み全体を理解する重要なポイントであると思われるからである。まずは先に挙げた二つの問いについても、この人間学的構想という観点から読み解いてみたい。

第一の問い「なぜ、精神医学者ヤスパースが新たに哲学者へと転身したのか」については、ヤスパースには、精神医学研究を選び、没頭するその最初からすでに「人間とは何か」という哲学的問いがその研究の中心的動機として存在していた。だからこそ彼は、先の引用にあるようにそもそも人間に対する哲

8) ザーナーはヤスパースの『遺稿』(Nachlass)の第一部からこの箇所を引用しているが、その遺稿の何ページから等についての明記はない。J, S. 21. 邦訳24ページ。

9) J, S. 31. 邦訳36ページ。

学的関心から医学，さらにその中でも精神医学研究を専攻した。そしてさらに彼は，ハイデルベルク大学精神科クリニックにおいて精神医学者，精神科医として，機械論的医学の観点から研究と臨床の現場に身を置きつつも，なおも機械論的医学に縛られることなく，独自に哲学的問題意識に満ち溢れ，「人間とは何か」，「人間はどう捉えうるのか」といった場違いな哲学的問いにこだわったのである。そこまで切に人間学的構想を抱いておればこそ彼は，科学的立場に立ち，人間を「もの」として機械論的に捉える機械論的医学としての精神医学からは，どうしても人間存在は汲みつせないということに彼は身をもってぶち当たり，その限界にどうしようもないジレンマを抱え込むこととなった。そして彼は，精神医学ひいては科学が人間をどう捉えどう解明しうるのかその可能性と限界を見極め，さらなる人間存在解明の方法論を追求しようと精神医学の中でもさらに精神病理学に研究を絞り，そこで哲学などを補完的に取り入れ学際的に研究を進めるにいたったのであった。それは以上のように，彼が初めから精神医学という広範囲な深みを求めたのではなく，人間学的構想をそこで目論んでいたからと言えよう。人間存在解明の可能性を探る人間学的構想の下で，科学の限界を身をもって体験した彼の学際的探求がここに始動した。そして彼は，そのような構想の下にあってこそ，前期の主著『精神病理学原論』を完成させ，高評価を得るだけに止まらず，独創的かつ学際的研究をさらに順調に押し進めていくことが可能であったのだ。

当時他にもそういった構想をもち，精神医学者の道において学際的研究を全しようとする学者があったとしても不思議ではない。しかしヤスパースの場合，難病を抱えるその数奇な運命がその道を許さず，いや応無しに哲学へと転ぜざるを得なかった。つまり彼は，精神医学者でありながらも人間学的構想にあって機械論的医学から哲学の分野へと踏み越え，暗礁に乗り上げていた人間存在解明のさらなる深化を学際的に模索する研究を順調に続けていたのだが，その一方で精神医学研究のための夢のようなポストさえ辞退せざるを得ない深刻な身体的状態を抱え，またヴェーバー死後哲学の担い手としての自覚が強まる心

境下において、当初は消極的にはあるが目の前に開かれた哲学者への道を選び取り、自らの専門自体を哲学へと転じざるを得なかったのである。しかしその転身こそが、人間学的構想に基づく本格的な哲学構築へと彼を運命づけることとなった。ヴェーバーの死を機に哲学研究が自らの新たな使命になったという一見突拍子もない彼の二次的転身理由も、前述の通り身体上の理由から精神医学者としての道を閉ざされる中で、現代において人間、ひいては人間社会を問うヴェーバーに自らの人間学的構想との近似性を読みとり、ヴェーバーの後を引き継いで本格的に人間学的構想を自ら探求すべく精神医学から哲学へと転じ出て行こうとする彼の決意表明だとも捉えられよう。

以上のようにヤスパース自らにある人間学的構想の深化と共に、その経歴もそれに沿うように、精神科医、精神医学者、精神病理学者から心理学者へ、さらには強いられた運命、いや時代の要請というべきか、難病を抱えた状況下において消極的に哲学者へと転身を遂げざるを得なくなった。しかも前期ヤスパースにあるこの人間学的構想こそが、転身の直接の理由ではないが、転身を失敗に終わらせることなく、転身後の研究を実り多きものとした。前述の通り、難病を病んでいる、また使命感を感じると言った理由だけからの他分野への場当たりの転身では、新たな優れた研究成果は容易には期待できないであろうが、やはり彼の内にそのような人間学的構想に基づく一貫した研究姿勢が初めからあればこそ、精神医学から哲学へという全く違う分野への歩みの中でも、成熟へと向かう学的実りが可能だったわけである。したがって結果的に転身以前の前期ヤスパースは、それ以降の中期、後期に対して備えられた「人間学的構想を練り哲学構築を為すための重要な準備期間」として捉えられる。つまり前期ヤスパースの内にみなぎっていた人間学的構想が、精神医学研究において哲学的思索の介在のうちに練られ、それがさらに中期、後期ヤスパースにおける哲学研究で自らの哲学としてさらなる深化と展開を遂げたのだ。たとえ自らの名前を不動のものとしていた精神医学研究から専門外の哲学研究への転じであっても、研究目標は揺るがず変わることなく人間存在解明へと一貫して注がれた。

それはザーナーが、思惟の全史において見られる二つの特徴をヤスパーズが「人間の哲学」と「世界哲学」とに分けたことに言及した際に、「心理学者であり実存哲学者であったヤスパーズは、この区別に従うと、自分自身を世界哲学者ではなく、人間の哲学者として理解していたのだろう。つまり彼は、本来的な哲学者であろうとしなかったに違いないということである。なぜなら彼にとって、世界について心を煩わすことは、関心の中心ではなかったからである」¹⁰⁾と言う通りである。彼は、精神医学研究においてと同様に哲学研究においても、哲学という広範な深みを求めたのではなく、人間学的構想をそこで目論んでいた。

したがって以上のように消極的に開かれ、新たに歩まざるを得なくなった哲学の道であったにもかかわらず、そこにおいてこれまで抱いてきた人間学的構想を、さらに見事、独創的に仕上げていったところに彼の研究者としての特徴があろう。彼は哲学に転じた後も転身以前の研究で獲得した人間存在解明に対する様々な思索を発展させ、独自の実存哲学を構築し、その実り豊かな歩みを貫徹させた。その歩みは、結果的に後世の我々が振り返るならば、人間学的構想にある必然の歩みであったとさえ思われる。大卒での研究構想がヤスパーズの場合は人間存在解明に常に集中していたことから、人間理解をめぐる「精神医学から哲学へ」という一つの思索の流れが実はそこに読み取れるのである。そのヤスパーズにある精神医学から哲学へといったダイナミックな歩みとは、科学者ヤスパーズ自らの「啓蒙のプロセス」、つまりそれは、人間存在解明の下にヤスパーズ自身の精神医学研究、哲学研究においてなされた「科学信仰から哲学へと蒙が啓かれたプロセス」とも換言できよう。科学者である彼にとっては、人間はあたかも科学によって物的に理解可能のように思われたのであるが、その思い込みは打ち砕かれ、結果的にはあるが彼はさらなる歩みを哲学へと進めたからである。

10) Hans Saner, *Einsamkeit und Kommunikation*, Basel, Lenos Verlag, 1994, S. 110. (盛永審一郎・阪本恭子訳『孤独と交わり』見洋書房, 2000年, 35ページ)。以下, EuK と略記。

III 医学と哲学

ルードルフ・アラースがいかなる意味で、『外科とプラトン主義』や『皮膚科学とミルの哲学の関係』という表現のこっけいさは『実存主義とヤスパースの精神医学』という表現のうちにはない¹¹⁾と言ったにせよ、医学と哲学、この一見無関係でこっけいな組み合わせが、ヤスパースの歩みにおいてはこれまで考察してきたように人間学的構想において重要な意味をもっていた。したがって彼は、医学の一分野、精神医学に携わりつつも人間学的構想をもって思索し、そこでの構想を生かして独自の哲学者として大成した。したがって彼は、前稿で仮定された単なる「精神医学者兼哲学者」ではない。

ハイネマン (Fritz Heinemann, 1889-1970) は、その点、ヤスパースを「精神病理学的哲学者」¹²⁾と呼ぶ。実存哲学者ヤスパースというイメージが先行している今日にあって、この「精神病理学的哲学者ヤスパース」という呼び方は、後にも先にも彼以外にないユニークなものであるが、以上の考察を考慮するとヤスパースにおける哲学以前と以後との関係を考慮したなかなか的を得た表現であることが分かる。しかしハイネマンのように「精神病理学的哲学者」としてしまえば、彼が哲学以前においては精神病理学というなにか狭い学問領域だけにとどまっていたかのように思われる危険を孕む。確かに彼は自らの研究を精神病理学へとしばり論文を書き認められた。しかしそれは前稿で見たように、彼に精神科医であり精神医学者であるというバックボーンがあればこそ、精神医学の一分野、精神病理学へとさらに研究を深め、独自の精神病理学を構築しえたのである。その経緯が見失われてはならない。そのためにも私は、彼における哲学以前、以後の関係を考慮するならば、彼は人間学的構想を抱い

11) フランクル、宮本忠雄・小田晋訳「訳者あとがき」『精神医学の人間像』みすず書房、2002年、127ページ。

12) Fritz Heinemann, *Existenzphilosophie lebendig oder tot?*, Stuttgart, W. Kohlhammer Verlag, 1954, 2. Aufl., 1956, S. 61. (飯島宗享他訳『実存哲学 その生けるものと死せるもの』理想社、1964年、98ページ)。

て研究を学際的に展開した「精神医学的哲学者」とするべきであると考え。

また付け加えるならばハイネマンは、精神病理学的哲学者という呼び方でヤスパーズの精神医学者時代と哲学者時代とのつながりを示唆するのだが、精神医学者ヤスパーズと哲学者ヤスパーズとにあるつながり、さらには彼の哲学がどのような点で精神病理学的なのかについては明らかにしていない。しかし我々は、これまで考察してきたように彼が、人間学的構想を抱き一貫して人間存在解明をテーマとして追求すればこそ、自らの精神医学研究においては研究を精神病理学に絞り、さらに転身後には実存哲学構築へと研究を絞ったと考え、その点について明らかにすることができた。そしてさらに我々は、彼においては精神医学と哲学という全く違ったものが共に人間学的構想において堅く結びつき人間を解明する示唆を相互に与えながら発展し、ついには実存哲学構築へといったと考えるが故に、彼を「精神医学的哲学者」と呼ぶのである。

したがって第二の問い、「なぜ、精神医学者ヤスパーズの哲学者への転身が当時ハイデルベルク大学において正式に認められたのか」についても、ヤスパーズにある人間学的構想に基づく哲学的萌芽が評価され、精神医学的哲学の展開を期待されたと考えるとその問いが解かれる。つまり、20世紀初頭という科学万能という考え方に陰りが見え、人間に対する科学的理解も行き詰まりを見せる時代の中で、確かに独自の哲学的著作はまだないが、人間学的構想に立ち人間に対する学的解明をさらに哲学的に探求しようと模索し続ける精神医学者ヤスパーズに、新たな哲学構築への期待が周囲の学者の間で高まったというわけである。独自の人間学的構想にあって人間存在解明を哲学的に模索するという彼にある学的方向性が、20世紀初頭ドイツのハイデルベルク大学において積極的に高く評価支持され後押しされることにより、初めてその当時は哲学的業績に乏しく哲学博士でもない医学博士ヤスパーズが、ハイデルベルク大学を舞台にして精神医学から心理学、さらには哲学へと専門分野を転じて哲学教授として正式に迎え入れられることができたのである。

しかも精神医学者ヤスパーズにある哲学的萌芽、人間学的構想に対し、共鳴

し積極的に支持したのは前稿で考察したように、哲学を専攻としない他の学問領域にある学者ら、特に精神医学者ニッスル (Franz Nissl, 1860-1919) と社会学者ヴェーバーであったことも興味深い。当時の哲学者にではなく、彼ら精神医者や社会学者に哲学者への転身を支持され、それが実現した彼の特異性は際立っている。他分野にあり哲学には明るくはないがそれぞれの分野で人間を見つめ、解明しようとして模索していた彼らが、そこまで彼を支持したのはやはり彼にある人間学的構想という哲学的方向性を当時の重要な学的課題の一つだと強く共感したからであろう。またハイデルベルク大学精神科クリニック主任教授として、常に精神医学者ヤスパースのそばにあって彼を指導し育て哲学者への道を開いたそのニッスルの学的影響は、前期においてはもちろんニッスルの下を離れた以降の中期、後期においても彼にとって大きかったに違いない。したがって次節において彼とニッスル、さらにはクリニックとの関わりについて考察し、彼にある「人間学的構想」がいかにしてクリニックで練られ、それが専門外であるニッスルにさえ認められるにいたったかについて彼の自伝を中心に明らかにしてみよう。

IV ニッスルにある批判的助成的態度

ヤスパースは、前述のとおり子供の頃から難病である気管支拡張症と二次的心不全に悩まされていた。したがって彼は「正式の助手となるには、私の病気がいうことをききませんでした」¹³⁾と言う。そのような人材は、本来ならば無給でも「お荷物」であろう。それにもかかわらずハイデルベルク大学精神科クリニック（以下クリニック）の主任教授であったニッスルは、彼を1909年にクリニックの無給助手として採用した¹⁴⁾。ニッスルがそのような彼を無給助手と

13) PA, S. 19. 邦訳23ページ。

14) 「1908年から1915年に至るまで、私は国家試験が終わるとすぐ引き続いて、まず医学実修生として、次いで内科クリニックの神経系疾患部門で研修を受けた半年の中断以後は、無給助手としてハイデルベルクの精神科クリニックの仕事に従事しました」(PA, S. 17. 邦訳19ページ。)とヤスパースはいう。ザーナーはそのことについてより詳しく以下のようにいう。ヤスパースは「1908年1月18日、国家試験の最後の日に、医学実習生として精神科クリニックに申し込みをノ

してクリニックに抱え込んだということは、それだけ彼に対する研究上の期待が高かったからだと窺い知れよう。確かに彼は言う、ニッスは「私の学位請求論文『懐郷と犯罪』にたいへん満足して、私に最高点をつけ、私の入局希望を許可してくれたほどでありました」¹⁵⁾と。この論文「懐郷と犯罪」(Heimweh und Verbrechen)とは、1801年から1908年までに作成された約20の主に少女による殺人犯罪に関する調査書を、1909年以降研究し、その動機に両親の住む故郷へ帰りたいという「懐郷」を読み取ったという極めてユニークな論文である。しかしたとえ彼の論文が優れていようともそれを高く評価するのみならず、難病に病む研究者ヤスパースに特別に研究の機会を与えたのはやはりニッスの先見の明というしかない¹⁶⁾。

このようにして1909年から1915年までヤスパースは、クリニックにおいて無給助手となることができた。そしてさらに彼は、無給助手をしながら研究を推し進め1913年見事に『精神病理学原論』を著し前稿で考察した通り高い評価を受け、一躍著名な精神医学者へのし上がった。したがってここで強調しなければならないことは、20世紀を代表する精神医学者ヤスパースは、ニッスとクリニックという環境を抜きにしては誕生し得なかったということである。しかもそれは、ニッスの下にあるクリニックが、彼の研究と同様の方向性を持ち彼の研究に好都合であったからではない。いやむしろ以下に見るように、両者がその相反する方向性をもっていたが故に、彼は時にニッスらクリニックの研究に学び、時にその限界を見て取りつつ、自らに独自の精神病理学研究を構築しえたのであった。

、し、【実習年】の前半をそこで、後半を神経学教室 (Neurologie) で研究した。医師資格取得 (1909年) のあとで、クリニックの長フランツ・ニッスは、彼の学位請求論文が気に入ったために、彼を助手として採用した。こうして彼は6年間 (1915年まで)、クリニックに留まったのである」(J, S. 26, 28 (S. 27 は写真のみ)、邦訳30ページ) と。

15) PA, S. 28. 邦訳37ページ。

16) アンドレ・ボルティンガーによれば、「懐郷と犯罪」というヤスパースのこの当時の研究テーマは、1688年のパーゼルにも医学のテーマとしてあったばかりか、それは今日の医学においても心理学に取り組む際の重要なテーマでもあるという。(André Bolzinger, "La Nostalgie Selon Jaspers," *Évol Psychiatr*, Vol. 64, 1999, pp. 259-270.)

というのは当時のクリニックにおいては、精神医学も科学の一分野である以上、徹頭徹尾身体医学であることを目指していた。特にハイデルベルク大学といえはクレペリンが1891年から1903年まで教授として勤めていたところあり¹⁷⁾、そのクリニックこそが当時の体因性を支持する精神医学の牙城のひとつであった。当時ヤスパースが所属していたクリニックは、クレペリンの精神医学を精神的共有財産とし¹⁸⁾、体因性からの精神障害を解明する方法論の展開を当然の使命として前提としていたのだ。つまりそこにおける精神医学とは、機械論的医学以外の何ものでもなかった。

そのようなクリニック共通の方向性の下にありながらも、ヤスパースは、『精神病は脳疾患なり』（グリーンジャー）という身体医学的ドグマのみならず、『精神病は人格の疾患なり』（シューレ）という命題をも認め¹⁹⁾た独自の方向性をもっていた。つまり彼は、クリニックが取り組む体因性のみならず、さらに心因性、内因性をも認め、精神医学をその根本から哲学的考察をも駆使して見直そうと考えていたのである。それは体因性から精神障害に取り組むクリニックの常識からすればまさしく逸脱した考え方であった。であるからニッスルは、「ヤスパースというひとは気の毒だね、……全くばかげたことをやっている」²⁰⁾と間接的に批判した。またニッスルは直接彼に、「何てきみは蒼い顔色をしているのかね、きみはあんまり哲学をやりすぎるんだ、そのことに赤血球がもたないんだよ」²¹⁾とも揶揄している。この言葉からいかにニッスルが、彼にある独自の研究に面食らい冷ややかであったかが伺える。というのは、優れた脳組織学者であり、前述の通り機械論的医学として精神医学を捉えていた

17) 西丸四方氏によれば、クレペリンは、1891年からフルストナーの後任として「ハイデルベルクの教授となり、1903年にプムの後任として、……ミュンヘンに移った」のである。一方、ヤスパースは、「1906年から1908年にハイデルベルクに移ったので、クレペリンに教わったことはなかろう」ということである。(西丸四方『精神医学の古典を読む』みすず書房、1989年、303-304ページ) という。

18) PA, S. 20. 邦訳24ページ。

19) PA, S. 22. 邦訳27ページ。

20) PA, S. 28. 邦訳38ページ。

21) PA, S. 29. 邦訳38ページ。

当時のクリニックの主任教授ニッスルにとっては、当然精神医学とはなによりもまず脳の器質的变化の研究を意味していたのであり、人格への配慮や哲学的考察などは無益なものとして軽視していたからである。

しかしヤスパースは、前述の通り独自に人間学的構想に立っていたが故に、機械論的医学からも自由に人間とは何かということを自らの研究において追究し続けることができた。しかも精神医学をそのような独自の視点で研究しようとしていた彼にとって、このニッスルの下にあるクリニックの環境は逆に最適であった。おそらくこの研究環境なくしては人間学的構想を練ることもその成果としての『精神病理学原論』を世に出すこともできなかったであろう。では、その研究環境にある特徴とはなにか。それは大きく分けて二点挙げられよう。

第一点は、ニッスルが、無給助手であり研究の方向性においては一人異邦人の如きヤスパースを、クリニックのメンバーとして「全く自由に」研究に参加させていたということである²²⁾。ニッスルにとっては、本来病弱であり夜勤も医師の会食会にも参加できず医師の条件を満たさない彼は単なるクリニックの無給助手にすぎない。しかもニッスルは、彼の学説を前述のように批判し冷笑していた。それにもかかわらず、彼に対してニッスルは、医師、学者として否定し他の研究者と分け隔てするどころか、医師、学者として彼を認め、クリニックにおける回診をまかせ、研究会への参加や自らの研究をさせるなど、難病の無給助手へのものとは思えない待遇を用意した²³⁾。ザーナーもその様子を次のように語る。「ヤスパースがクリニックにおいて占める地位は、普通とはちがっていた。彼は病気ゆえに、通常の勤務時間の義務を免除されていた。あ

22) PA, S. 28. 邦訳37ページ。

23) ヤスパースは、クリニックにおいては、「私は研究への参加が許され、主任教授や医師たちの親切な取りはからいをえ、あらゆる研究会に出席もし協力もしましたし、回診にもつきました」(PA, S. 19. 邦訳23ページ)という。

また、ヤスパースは、「ハイデルベルクにおける精神病学の臨床教室の私の主任教授であるニッスルは、私たち助手に、創造的な思索家であり医師である己れの自己批判を自由討論のなかで示してくれました。私は精神病理学の研究会に参加しました」(RuA, S. 328-329. 邦訳15ページ)という。

らゆる集会や討論への出入り、すなわち共同の回診、患者の症例報告、クリニックにおける鑑定上の相談、ニッスルとともにする学術的な集い、ニッスルの参加しない、グルーレのもとでの私的な討論などへの出入りは、彼には自由にされていた。彼は、興味ある患者を検査のために自分で選ぶことを許され、テストを行なうことができるように自由に使える一室をもらい、司法鑑定者となり、学生健康保険組合の神経および精神疾患の医師になった。かくして彼は、精神医学のあらゆる面と、心理学的、法律学的、社会学的、教育学的な面をも、垣間見るに至った²⁴⁾のであると。

そのようなニッスルの計らいによる研究環境の中でこそ、ヤスパースは、当時の精神医学の最先端を肌で感じ、そこから人間存在解明に対する機械論的医学の限界など多くを学び取って、人間学的構想の下にあって新たな独自の研究の方向性を確信しその歩みを独自に進めることができたのである。特にニッスルの下にあって、精神病を体因性からのみ解明することの限界を当時直接学び確信することができたことは大きかったであろう。しかも彼は、それを同じ研究者の立場から追体験するのみならず、精神障害を脳疾患として体因性からのみひたすら解明しようと取り組み、多くの疑問にぶち当たりながらもその事実には誠実に対するニッスルの研究者としての姿勢にも多くを教えられた。彼が言うように、ニッスルは、「精神病患者の認識において自然科学的に可能と考えられる、脳組織の病理学的変化と精神疾患の対応関係の存在というような思い切った希望の見通しを立てて研究したひとであります。そうした見通しが成立しなかった場合にも、誤りを認めるのに吝かではありませんでした。……彼は一定の方法によっていろいろな所見を解明しながら、それらが有する意味の限界をも認識²⁵⁾していたのである。

第二点は、ニッスルが、見解の違うヤスパースの論を自分なりに十分に吟味した上で的確に批判したということである。ヤスパース自身、「それにしても

24) J, S. 28. 邦訳32ページ。

25) PA, S. 17. 邦訳19-20ページ。

この上なく忘れがたい印象を受けたのは、私の仕事に対するニッスルの批判的助成的な態度でありました」と言う²⁶⁾。そこには厳密さを求める学的な批判はあっても悪意のある乱暴な批判や否定は含まれない。であるからニッスルは、時に彼の論のうちに学的な一致や優れた点を見出した場合にはためらうことなく謙虚にそれを賞賛した。

たとえば、ヤスパースは論文「精神病理学における現象学的研究方向」²⁷⁾を発表した時のことを以下のように振り返る。ニッスルは「外来診療室へ入ってきて、私が現象学的に診察する際に傍聴していてよろしいかを私に尋ねにまいりました。幸い私は、初期精神分裂病を手掛かりに、若干のことを明瞭に示すことができました。ニッスルは非常に満足^{てい}の体で、現象学を用いてとにかく相当のことができるね、といました²⁸⁾と。またさらに彼は、『精神病理学原論』の校正刷をニッスルにわたした時のことも次のように振り返る。その後、何日間も彼が自分のポケットにそれを入れて持ち歩いているのを見かけた。そして、後日「本書についてニッスルが、『立派なものだ、クレベリンをはるかに凌駕している!』とヴェッツェルに漏らしているのを」聞き知ったと²⁹⁾。

さらにそのような批判的助成的態度は、前述のクリニック医師グルーレ(Hans Walter Gruhle, 1880-1958)においても同様であった。グルーレは、この異端児ヤスパースに対するもっとも鋭い批判者であった。しかし、グルーレについて彼は次のように言う。「彼の批判は実り豊かな刺戟となりました。……グルーレは一見すべてを破壊し尽くすかのような批判を加えました。こうした結果初めて私は、正しい道に確信がつき、短時日のうちに論文を書き上げ、すべてをより明確に理解して、原稿をグルーレの一覽に供しました。すると今度は、私の非常に意外とし、喜びとしたところでもありましたが、彼は見解の

26) PA, S. 28. 邦訳37ページ。

27) Jaspers, „Die phänomenologische Forschungsrichtung in der Psychopathologie“, *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, Bd. 9, 1912, Originalien, S. 391-408, (Berlin und Leipzig, J. Springer/J. A. Barth).

28) PA, S. 29. 邦訳38ページ。

29) PA, S. 29. 邦訳38ページ。

一致を認めたのでした」³⁰⁾と。また1909年、彼は、このグルーレが催す会合にて、ヴェーバーとの運命的な出会いを果たした³¹⁾。彼は、グルーレなしにはヴェーバーとの重要な出会いも実現しなかったかもしれない。また前稿で考察したように、彼がハイデルベルク大学に心理学の研究施設設置を働きかけた時、それに協力したのもグルーレであった。

V かけがえのないハイデルベルク大学精神科クリニック

以上のようにしてヤスパースは、病弱なクリニックの無給助手という立場にありながらも、自らの研究においては素晴らしい学的環境を得ていた。彼は、クリニックとは研究の方向性そのものが異なるにもかかわらず、当時の精神医学研究の最先端であるクリニックで自由に研究の機会を与えられ、また研究会にも出席を許され他の研究者との交流の中においても的確な教育的、建設的な批判を受けることができた。その独創的な研究を切磋琢磨する機会が、彼により深く自らの研究を仕上げることを可能にしたのだ。

つまりは無給助手ヤスパースが、1913年に著した自らの精神病理学研究の集大成、『精神病理学原論』を発表するやいなや、それは一躍ニッスルはもちろんのことあらゆる精神医学界の研究者から注目を集め認知されることとなった。クリニックにおいても最初は冷ややかに受け止められていた彼の研究が、逆にこの書を通じて精神医学にはかけがえのないものであるとして大きく迎え入れられたのである。というのはこの書は、単に哲学など学際的な方法論を駆使、展開した精神病理学的成果に留まらず、当時の精神医学の状況をクリニックにあって的確に踏まえ、また当時最先端の生理学的、神経学的知識を前提としていたからである。それはやはり彼が、ニッスルの下で20世紀初頭精神医学の最先端を担うクリニックに属し研究してこそ為しえた、精神医学上の問題点的的確な把握と分析、さらには新たな精神医学における方法論の独自の展開にほか

30) PA, S. 27-28. 邦訳36ページ。

31) PA, S. 34. 邦訳46ページ。

ならなかった。人間学的構想を抱く彼に対し、その誠実な研究者の批判と指導の下にあった卓越した環境こそが、機械論的医学の限界を痛感させ、彼をそのパラダイムから自由な研究へと鍛え羽ばたかせたのである。人間学的構想をもって人間を見つめ続ける彼であればこそ、機械論的医学の視点に立つクリニックで独自にその重要性を認めつつも、その限界を見て取りそれをどう克服すれば良いか学際的な視点で模索しつづけることが可能であり、この書が完成にいたったのである。したがって彼の精神医学研究、さらには人間学的構想のさらなる展開は、主任教授ニッスルや同僚グルーレらなくしては考えられない。彼の臨床と研究を可能とするばかりではなく大きくそれを支え育んだのは、まさにニッスルとグルーレ、さらには彼らが属する当時のクリニックなのであった。

以上のようにクリニックにあるニッスル、グルーレらのヤスパースの研究への批判的助成的態度は、彼の人間学的構想の下にある精神医学研究そのものを大きく発展させたばかりではない。そのような態度にあってニッスル、グルーレら自身も、自らにある立場とは根本的に異なる人間学的構想にあり精神医学研究に没頭する彼と真摯に向き合った結果、精神医学においても機械論的医学に縛られることなく心因性、内因性にも目を向け、人間学的構想において人間を学際的に探求する彼の研究に意義を見い出すこととなったのである。そこにおいてニッスルは、彼における人間学的構想を優れた哲学的萌芽として確信し、そのさらなる発展の可能性を哲学の分野に読み取り、彼の哲学者への転身の道を積極的に支持、応援したのである。

であるから、精神医学研究さらには哲学研究においてヤスパースに多大な影響を与えた人物をあげようとする場合、まずニッスルその人に言及しなければならないことを私はここで強調したい。というのは彼に直接影響を与えた同時代人をあげる場合、一般には社会学者ヴェーバー、哲学者ハイデッガー、リッケルトといった人物がまずあがるが、以上のように精神医学者ニッスルの存在は、人間学的構想にある彼に、人間存在解明上科学とは何であり、それにあ

る人間存在解明における可能性と限界を示唆し、その結果哲学の必要性を痛感させるという、彼の精神医学の歩みにおいて極めて重要な役割を果たしただけでなく、支持支援することによって彼に哲学への道をも可能にさせたからである。彼が人間学的構想を深く実り多きものとして練ることができ、また哲学者へと転身することができたのは、実は他の哲学者によるのではなく精神医学者ニッスルによるところが大きいのである。

またヤスパースのその後の哲学者としての研究生生活を思う時、研究者仲間恵まれない彼にとって実はニッスルの下にあった研究生生活は宝物のような思い出であったことも特筆すべきであろう。実際彼は『精神病理学原論』の執筆依頼を受けた時、全身に緊張をみなぎらせながらも、自分自身がこの「クリニックの精神と共有財産によって支えられているのを意識する」³²⁾ ことにより勇気づけられたと言っている。またこの書が高く評価され他大学において教授資格が受けられる吉報がニッスルからもたらされた際にも、前稿で考察したように彼はハイデルベルク大学に残る道を選ぶ。すなわち「ハイデルベルクは私にとってたいへん切実なところですから、ここにとどまって待つ方を選びます。しかもおそらく、私は哲学部で心理学の教授資格をとることができるでしょう。われわれはそこにいわばコロニーを置くのですね。そうするとあとで私はクリニックへ戻ることができます」³³⁾ と彼は言った。彼が他大学の精神医学教授のポストを蹴ってまで、ハイデルベルク大学の心理学講師に自ら落ち着いた理由は、ハイデルベルク大学にあるそのクリニックにつながっているためであったのだ。そこから当時の彼にとって、どれだけクリニックが切実なものであったかが分かる。しかもクリニックを去り哲学的歩みへと転じてもおも彼は、「わがハイデルベルクのクリニックにおける精神的団結の思い出は、私の生涯について廻りました」³⁴⁾ と言う。そこからもいかに彼がニッスルにあるクリニックを敬愛していたかが分かるであろう。これまでの考察から、彼の独自の

32) PA, S. 23. 邦訳28ページ。

33) PA, S. 29. 邦訳39ページ。

34) PA, S. 31. 邦訳41ページ。

人間学的構想に基づく精神医学，精神病理学，さらにはその後の哲学は，このクリニックなくしては構築しえなかったことを考慮すれば，以上のような彼にあるクリニックへの敬愛は驚くべきものではなく，むしろ自然な感情であろう。